

## 令和5年度 第2回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日時】 令和6年3月8日（金）  
14時00分～16時00分

【場所】 新潟市歴史博物館セミナー室

【出席委員】 渋川 綾子 副会長 （にいがた湊あねさま倶楽部）  
石黒 裕則 委員 （新潟市立木崎中学校長）  
石塚 正朗 委員 （新潟日報社 読者局 事業担当部長）  
久保 有朋 委員 （古町花街の会）  
坂井 隆一 委員 （新潟市立和納小学校長）  
中村 美香 委員 （(有)ミカユニバーサルデザインオフィス）  
南雲 友美 委員 （公募委員）

【オブザーバー】 萬歳 真紀 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 坂井 秀弥 新潟市歴史博物館 館長  
小林 隆幸 新潟市歴史博物館 副館長  
高桑 一代 新潟市歴史博物館 総務担当次長  
大森 慎子 新潟市歴史博物館 学芸担当次長  
鷺尾 雄二 旧小澤家住宅 館長  
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長  
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長  
設楽 明子 新潟市歴史博物館 職員  
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員

## 【 次 第 】

### 1.開 会

### 2.館長挨拶 詳細別紙

### 3.議事

#### (1) 令和5年度の館運営報告状況

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 1～4 に沿って、事務局から説明。

#### (2) 令和6年度事業計画書

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 5～6 に沿って、事務局から説明。

《 質疑応答 》 詳細別紙

#### (3) 令和6年度運営協議会に向けて 詳細別紙

### 3.閉会

## 《館長挨拶》

(坂井 館長)

日頃より委員の皆さまにはみなとぴあの運営についてご指導・ご支援いただき感謝申し上げます。博物館として外部の意見をいただく貴重な機会。いただいた意見をもって改善を図っていきたい。

1月1日の能登半島地震では皆さまのところでも被害があったかもしれない。私の自宅も庭の灯籠が目の前で倒れた。本日配布の企画展チラシにもある1964年、新潟地震が発生した時、私は小学校4年生であったが、このことを鮮明に記憶している。自宅も土台が傾き住めなくなり、ライフラインでは電気が一番早く復旧したが、水道の復旧には一番時間がかかり、給水車に足を運んでいた記憶も蘇った。

今回の展示では新潟地震直後に新潟大学理学部の先生が現地調査をして作成した地図を拡大して展示している。それを見るとそこが信濃川の河川敷であったとか、砂丘の内側で水が溜まりやすい場所だったとかが分かる。一方で新潟市内は長大な砂丘が何列かあるがそこは被害がなかったことが分かる。

新潟市のハザードマップは地形や環境、地盤などの要素が入っており、それに加えて歴史的な経緯も見られると感じている。かつて新潟地震で被害に遭われた場所のうち住宅地になった部分がある。そうした住宅地が被害を受けていることを考えると、歴史、地質、環境の情報を確実に将来に伝えてこれからの都市計画や町づくりを考えていく必要があると改めて感じた。

本会議の後、「1964展」でそれらの展示をぜひ見ていただきたい。一方で東京オリンピックや国体は大変楽しい事柄であり、これから新しい新潟ができるのだと感じた出来事であったので、その一端を感じていただきたいと思う。

## 《質疑応答》

(久保 委員)

高校生ボランティア、素晴らしい取組みと思う。活動の仕方については、ガイドするにあたって内容が一般ガイドとの違いがあるのか、研修スケジュールや密度、実際の活動実態としてどの程度一般の方と比べてやってくれているのか。

2点目。小澤家の展示に「みなとまち新潟の芸と風土」の企画があったが、みなとぴあも大森次長を中心に展示全体に関わられていたと思う。事業としてみなとぴあは記載ないことに疑問を感じた。

(小林 副館長)

高校生ボランティアの発端は、新潟工業高校のボランティア部。クラブの指導の先生が当館のボランティアに参加されていたのが縁で、ガイドではなく体験の方でお手伝いが出来ないかというのが最初のきっかけ。工業高校生の参加で感触を得たので募集し、色々な学校の生徒さんが参加してくれて大人数になった経緯がある。今のところ活動は子ども歴史クラブのサポートや、先日ラブラ万代に呼んでいただいて体験プログラムを行ったので、そういったところに入って手伝って貰うような状態で、ガイドしてもらうところまではいっていない。高校生ボランティアという固まりになって2年目、これから色々試行錯誤しながら、できるものやっけていくというところで当館も期待している。

(大森 次長)

高校生も目的がないと参加しにくく、意欲が減ってしまうので、夏休みに自分たちで企画した体験プログラムをやるということを目指して活動している。それぞれ学校が違い最初馴染めなかった学生たちも自分たちで何かやらなきゃ、ということで、例えば工業高校であれば金属加工の技術を生かしたり、文章だとかそれぞれの得意分野を生かして活動している。

「みなとまち新潟の芸と風土」という新潟大学が企画したイベントだったが、みなとぴあとしては私が企画に関わらせていただいた。みなとぴあでもエントランス、企画展示室・常設展示室に屏風を展示して見ていただいたり、旭町展示館の展示を任されたり加島屋の2階の展示を任されたりなどして関わった。

(久保 委員)

企画展でなく地域連携の方でもいいので活動の一つとして事業報告に載せた方がいいのではないかと思います発言した。

来年度事業についても2点。石川侃齋展については今年の雲坪展同様楽しみにしている。ただ令和5年度でも分析されていた通り、知名度が高いものでない限り来館者数が伸びない傾向があるようだ。昨年は地域連携することで来館者が増えたという話もあった。私の記憶では石川侃齋の屏風を下町の登録文化財である高須家で持っていたと思うので地域の建物同士で美術を通して、旭町でやられたようにコラボの企画展ができれば多少連携の中で来館者が増えてくる可能性があるのではないかと。もしまだ考えていないようであれば、可能な範囲で行ってもいいのではないかと。

もう1点、地域連携の一種として、齋藤家別邸では毎年貴重な資料をみなとぴあから貸していただき展示に使わせていただいている。みなとぴあで貸出可能

な資料のリストがあつて、文化施設間で情報をいただける仕組みがあれば相談しやすくなり、他館からも話が出て、より文化財資料の活用となるのではないかと思うがいかがか。

(小林 副館長)

昨日も新潟市域の歴史系資料館で年1回開く懇談会があつた。これは各施設が連携するためのもので協力し合ひましょうということで開催している。忌憚のない意見を出し合う雰囲気があり、我々も条件さえ整えば問題なく資料をお貸ししている。懇談会を利用していただくとか、連絡網を密にしていきたい。門戸を閉ざしているわけではないので、申し出があればいつでもお貸しできる。

(大森 次長)

先ほどの話の中で一つ追加となるが、先日新聞報道があつたが、池田孤邨のアメリカに渡ってしまっている屏風が高精細のキャノンの技術と京都の職人の技術を生かして、本物と見間違ふほどの複製品が作られた。それは阿賀野市に寄贈される。複製品を寄贈していく『綴プロジェクト』の中で作られて、新潟市は活用協力ということで私共も入らせていただいている。複製品だと付いていなければいけないとか湿度の管理をしっかりとしなければいけないなどの制限が緩み扱いやすくなっている。齋藤家も含めて資料を活用して、今回新潟大学があのようなプロジェクトを立ちあげたので、少しずつ新潟のみならずまち文化を感じてもらえるような雰囲気作りができるといいと思っている。石川侃齋展もそうだが、五十嵐俊明展で旧小澤家にもサテライトで展示してもらった。石川侃齋展はいい時期ではないが、お声掛けしてご協力いただけるような施設があれば、まち歩きを楽しみながら地域連携となる企画ができればと思う。

---

(中村(美)委員)

来館者数について、県内・県外分けての分析が望ましい。新潟駅がこの春リニューアルする。改札を出て観光案内所があり、そうしたところからの誘客もあるので、そうした方へのピーアールも出来、増えたらいいなという願いからである。また、年齢層をどう下げていくか。若い人たちから関心を持っていただくのはいいことで、たくさんを試みをされていることは好ましく、それが定着してくれるといいと思うのと同時に、そういう方たちがまた更にお客様を連れてくるとよいので、年代別もあると対策、次の手が打てると思う。

今日は天気が良かったせいか、観光循環バスにかなりの人が並んでいた。レンタサイクル、シェアサイクルのステーションでもあり、今年もミュージアムパスがあるといいと思うし、県外者の動き方が見えてきた方が博物館の連携も有機

的な動きが見えてくるのではないかと思う。

「学芸員の仕事」をクローズアップすべき。学芸員が何をする人なのか、こんな専門の人が居ると伝わってこないのはもったいない。

地域連携の部分では、自分はミズベリングや新潟2kmにも関わっているが、ライトアップをやりたいなどの企画も聞こえてきており、位置的にも組んでいけるといいなと思う。文化施設からの介入性もテーマに挙がっているが具体的に出てきていない。

障がい者、特にろう者の方は二次元コードを読み込んで、短くてもいいので文字があると分かりやすくなるという声がある。高校生ボランティアに考えてもらうのもよいのではないかと思うので、ちょっとした解説があるだけでも世界が広がるのでぜひチャレンジとして考えてほしい。

旧小澤家はユニバーサルまち歩きの方でも寄せていただくが、毎回驚かされ、楽しみ、予定以上に滞在したくなる施設。親しみやすく地域ならではのものを多く取りあげられているので毎回感動させられている印象。

視覚障がい者へも何かひとつチャレンジしていただきたいが、余白がないかもしれないので、こちら歩み寄りながら考えていけるといいと思っている。

(南雲 委員)

ライトな物からコアでニッチな物まで企画力が素晴らしい。博物館と言うと管理・維持・研究が事業になってくると思うが、10,000円の講座に38人集めるという稼げる博物館としても非常に素晴らしい。参加してみたかったという情報が今日分かるっていうのはもったいない。鎧瀧の排水機場など予定が合えばぜひ行ってみたかった。じゃあどこから情報を取るかというと、ファンの若返りという意味でも、インスタ。今、若い人はグーグルで検索はしないでインスタ検索である。みなとびあも「インスタ始めました」とあるが、1日1投稿を必ずやっても急にファンは増えないのでまめにやっていくことが大切。Instagramの基本的なところで、ハッシュタグをつけないと検索に引っ掛からない。#新潟市観光とか、今だと#北陸応援割#新潟とか入れないと上に上がってこない。みなとびあさんはハッシュタグが一つもないので、インスタの意味が違ってくるのでハッシュタグはつけていただきたい。無料の媒体、プレスリリースはしているか。20周年は食いつきがいいと思うので、TV局は来ると思う。プレスリリースのひな形を作っておくと簡単に入れられる。TV局が食いつくのは、「何周年」だとか子どもが活動しているもの、季節感のあるもの、急激に伸びているもの、ギャップなど。TV局のディレクターなどに優しくしてひとりつなげておくと、また紹介してもらえるのでもっとメディアを活用してほしい。

十日町市博物館では今『学芸員が紹介したくて仕方がない』という企画展をや

っている。学芸員ってどんな仕事をしているんだろう、というのがあるので、学芸員がワクワクするところ、学芸員だからこそその見せ方で違ってくると思う。

最後にもう一つ、外国人の外国語対応、二次元コードなど自分で楽しめるしくみがあるといい。

(渋川 副会長)

学芸員の顔が見える資料館というのは大事。やり方は色々あるだろうが、学芸員に会いに行きたくなって訪れるファンが増える。

10,000 円の受講料取れるのはすごい。勉強したい人は濃厚な物が欲しい。博物館にはそのスキルがあるので稼いでほしい。

---

(石黒 委員)

1 年間色々な企画をして運営がここまできたことを凄くと思う。財源は苦しいのかと感じるが、それをどう解決するかというと利用者数が多くなることかと思う。夏に子どもと自転車で来た際、イベントをしていて賑わっていた。イベントを楽しんでいる人とわざわざみなどびあに来た人との間に温度差があった。来たついでに寄る、二つの魅力があってここまでくるというのがあってもよい。インスタもそうだが、今、待っていても人は来てくれない。どうやって発信していくかということが課題。公民館も困っているという話だ。

1 つ聞かせていただきたいのは、利用者が 9,000 人くらい減ったということだが、いつも旅行割があるわけではないので新たな何かを考えていかなければいけない。来館者へのアンケートの工夫とは具体的にどんな工夫をしていこうと考えているか。

(高桑 次長)

具体的な検討は始めており、若い学芸員を中心に、二次元バーコードで回答が容易にできるとか、謎解きが流行っているので、アンケートと組み合わせるとか商品が貰えるとか、そのような仕掛けづくりを考えている。今始めているのがアンケートを書いてもらう場所。現在は何の変哲もない事務机なので、素敵な家具、テーブル・椅子を置いて、座ってみたいくなる場所を何か所か作ってアンケートを書いてもらいたいと思い、環境づくりに力を入れている。その後回答増につながる仕掛けづくりの検討を始めてはいるが具体的な方法はまだ決まっていない状況。また、現在回答してくれるのは高評価の回答が多い。良くも悪くも皆様からご意見を頂きたいと思っているので、まずは回収率を上げる。そこから県内・県外、年代別の割合の分析を行い、実態に近い数字を出せるようなものを作りたい。

(渋川 副会長)

来年度、何か対策として入館者を増やすための工夫だとか、イメージでもいいのでありますか。

(小林 副館長)

来年度 20 周年という節目の年になるので、定番ではあるが、多く市民に知っていただきたい企画展をテーマに設定している。さきほどミズベリング、新潟 2 km 連携などの話が上がったが、水辺が近くにあり、ウォーターフロントの博物館でもあり、唯一というか珍しい船着き場を持っている博物館でもあるので水辺を活用する、ウォーターシャトルを活用するようなものも盛り上げていきたい。北前船展ではウォーターシャトルさんにも協力頂いて、船を使って在郷町に行くという企画を打っていき、水辺に寄って貰って、水上コースを活性化していくと、特殊性のある博物館となるのではないかとの思惑もあって今回ツアー企画を組んでいる。

20 周年で博物館を取り巻く環境も変わってきており、アンケートの内容も変えていかないといけないと思っているので、外部から評価されながら方向を見直そうという心づもりで議論を始めている。またご意見いただきたい。

(鷲尾 館長)

当館は小さな館でスタッフも少ない。その割にイベントは多く行っている。新施設がオープンした際には初めてだから行ってみようというのがあるが、問題は二回目。市民の方に二回目以降足を運んでもらうためには、前回味わえなかった展覧会やイベント、興味ある講座など、陳腐化しない内容を引き続き打っていくしかないと思う。X (旧 Twitter) は日に 2 回更新しており、Instagram など情報発信の方法に遅れないように変えていくことは必要。一時中国の方が多かったが、実感としてコロナが収まっても中国の方は戻っていない。外国の方や県外の方を区別する手段は持っていないのだが、アンケートは月に 20~30 件、1 日あたり 1 件程度の回収で、書きたい方だけが書いているので、実態を 100% 一致した標本にはなっていない。外国の方には比較的多く訪れていただいている。先般、タイのインフルエンサーの方たちを招いて取材をしていただいたり、NHK ワールドのイザベラバードの番組で、ロケ地として当館が選ばれテロップで紹介された。そういった機会を捉えて、取材に答えていく、紹介されましたということをお願いしていくしかない。広く話題作りを継続していきたい。

---

(坂井 委員)

小学校目線の感想となるが、みなとぴあの利用に関しては新潟市の子どもた

ちの社会科教育育成の場となっていることをありがたく思う。二つの面があり、一つには集団としての受け皿。市内 106 校中 67 校と約 3 分の 2 が来館して質の高い見学ができています。誰もが授業の一環として学べる環境がある。もう一つは個としての受け皿。子ども歴史クラブ、古町子ども研究員など、歴史好きや社会科好きの子の人材育成の場となっている。こういった施設が新潟市にあることがありがたい。

どんなことを改善してほしいという意見の吸い上げはまだ出来ていないので、現場から声が挙がってくれば、それはまた次回とさせていただきたい。

---

(石塚 委員)

年間 15,000 人という来館者の推移ということだが、我々新潟日報社も年間 1、2 本は企画展をピーアールさせていただいている中で、残念に感じながら数字を拝見した。

1 点、お願い・要望というか一市民の部分を含めてとなるが、今年は佐渡がいよいよ（世界遺産）という中で、20 周年企画として、北前船の企画が入っているが、他の新聞社に伺う中でも佐渡に対するアプローチは多い。新潟県内外エリアからの玄関口として、まずここにきて佐渡の良さをよく知り、逆に佐渡から来てここに来ると新潟が分かる、よりバリエーションと深みのある情報や新しいものの展開ができると館の存在価値が上がる。特殊性・独自性という意味でここは最適な場所と思う。今、北前船の話ではあるがもう少しそこを突っ込んで展開いただければ、私共マスコミも一生懸命後押ししたい。カルチャースクールも懸命に講座をつくると思うし、私も事業の方なのでイベントをつくる。館の顔が更に大きくなる、声が更に広く届く、かつ佐渡の玄関口はここだということで進めさせていただきたい。

---

(萬歳 課長)

石黒委員からもみなとびあの財源が厳しいのではとの発言があったが、本課としても、みなとびあが開館 20 周年を迎えるということで、何か打って出なければという話が今年度あり、重点事業として「北前船展」の組み立てをさせていただいた。来年度当初予算は今審議中であるが、みなとまち文化をキーワードとした、新潟ならではのコンテンツを活かして事業拡大を目指すという予算編成方針も出ているので、新潟市としてもみなとまち文化の発信は非常に重要なターニングポイントを来年迎えると捉えている。当然みなとまち文化と言え、構成文化財である旧小澤家住宅、旧齋藤家も入ってくるので、ここ界限だけではなく、また先ほど小林副館長からも話があったように、川湊を巡ることによって当時の新潟市、今は合併しているが、当時経済的な結びつきが既にあったと市民の

皆さまに知らしめるとともに、新潟港から入ってくるとまずこの瀟洒な建物があり、インバウンドの方も来られていると思うので、二次元コードなどの改良なども急務ではあるが、両館の皆さまとお話しして、来年度心に残るような年となるよう努めてまいりたい。

---

#### 《次年度会議に向けて》

20周年を迎えることもあり、博物館を第三者の目線で評価していくことができなかと計画している。我々にとっての外部委員会というのはこの運営協議会となる。難しくない評価項目を設けて外部評価をできないものかと考えている。まだ構想段階であり、皆さまを外部評価委員として招集しているものではないので、負担の無い程度で進めていきたいと考えている。今回はその頭出しということでご承知いただければと考えている。

以上